

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホハツセが大君になってから、いくつもの伝えが出てくるが、大君になる前の猛々しい話が消え、どこか間が抜けておかしい話が続く。

◎次の話：またある時、大君は葛城山の上に登った。大きな猪が出てきたので、大君はすぐさま、鳴り鏑の矢を射たら、イノシシは怒って迫ってきたので、慌てて樹に登って歌った。

やすみしし わがおほきみの	八つの隅まで総（す）べなさる わが大君が
あそばしし ししの	狩り遊びをなさると イノシシの
やみししの うたきかしこむ	手負いのシシの 唸り声に畏れなし
わが逃げのぼりし ありおの	わが逃げ登った 高くそびえる丘の
はりの木のえだ	そのハンノキの枝よ 折れるな

◎次の話：またある時、大君は葛城山の上に登った。お伴する司のものはみな、紅の紐の付いた、青く染めた衣を賜って着ておったのじゃ。その時、向かいの尾根を、何から何まで大君と同じいでましのさま、装いのさまも、人々のさまも、みなそっくりで見分けができぬ一団がいる。大君は、

「この倭の国には、われを除いて大君はいないのに、今、だれがそこをいくのか」と問うた。

同じ言葉が木霊のように帰ってきた。それで大君はひどく怒り、すぐさま矢を番えると、向こうも同じように矢を番えておるのじゃ。また大君は声をかけた。

「名を名乗れ」とすると答えが返ってきた。

「われは、悪しき事も一言、善き事も一言、何ごとも一言で言い放つ神、葛城のヒトコトヌシの大神であるぞよ」大君はそれを聞くと、恐れかしこんでの、

「恐れ多いことでございます。わが大神が、まさかこの世の人の姿でお出ましになろうとは・・・」みずから佩いておった太刀と弓矢を身から外し、お伴の者たちの着ておった衣を脱がせての、それらの品を、ヒトコトヌシの大神に拝み奉ったのじゃ。すると、そのヒトコトヌシの大神は手を打って喜び、その奉り物を受け取った。

◎先生解説：オホハツセハ、マヨワと共にツブラノオホミを打ち倒すことによって皇位に就いた天皇。そのオホハツセが、葛城に入り、ヒトコトヌシにひれ伏したのち、ヒトコトヌシに長谷まで送られているのは、対立していた両者が、ここで和解するという歴史的背景があるのかも・・・。

◎次の話：またある時、大君は、丸迹（わに）のサツキノオミの娘、ヲドヒメを妻問うために、春日に出でました時、そのおとめに道で逢うたのじゃ。おとめは大君の姿を見るなり、逃げ隠れてしもうた。

をとめの いかくるをかを	おとめの 隠れている岡よ
かなすきも いほちもがも	くろがねの鋤を 五百箇（いほち）もほしい
すきはぬるもの	鋤起こし探し出そうものを

◎次の話：またある時、大君は、長谷（はつせ）にある大きく百枝（ももえ）を張った槻の木（ケヤキの古名）の下で宴を催した時、伊勢の国から来て仕えておった采女が、大きな酒杯をささげて大君に豊御酒を奉ったのじゃ。するとそこに、その百枝の槻の葉が散りかかって来て、酒杯に入ってしもうた。采女は、落ち葉が酒杯に浮いておるのも知らずにの、そのまま大君に差し上げたのじゃ。すると大君は、酒杯に浮かぶ葉を目にするやいなや、その采女を引き倒したかと思うと、手にした太刀をその首すじにさしあてての、切ろうとしたその時、采女は、

「あが身を殺しなさいますな、申し上げることがございます」采女は歌った。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎前回の続き：采女は、「あが身を殺しなさいますな、申し上げることがございます」采女は歌った。

まきむくの ひしろの宮は	纏向に建つ 日代の宮は
あさ日の ひでる宮	朝の日が 照り輝く宮
ゆふ日の ひがける宮	夕べの日が 空を駆ける宮
たけのねの ねだる宮	竹の根が 土を這う宮
このねの ねばふ宮	木の根が 土深くに届く宮
やほによし いきづきの宮	土も美しく 着き固めた宮
まきさく ひのみかど	大きく木の茂る ヒノキの御門
にひなへやに おひだてる	この新嘗（にいなめ：新米を神に供え食べる）の殿に 生い茂る
ももだる つきがえは	百枝にも茂る 槻の木の枝の
ほつえは あめをおへり	上の枝は 空を覆っている
なかつえは あづまをおへり	中の枝は 東を覆っている
しづえは ひなをおへり	下の枝は 雛を覆っている
ほつえの えのうらばは	その上の枝の 枝先の葉は
なかつえに 落ちふらばえ	中の枝に はらりと落ちかかり
なかつえの えのうらばは	中の枝の 枝先の葉は
しもつえに 落ちふらばへ	下の枝に はらりと落ちかかり
しづえの えのうらばは	その下の枝の 枝先の葉は
ありきぬの みへの子が	ありったけの衣を着た 三重の子が
ささがせる みづたまうきに	捧げ持つ 美しい酒杯の中に
浮きしあぶら 落ちなづさひ	浮きし脂のごと 落ちて漂い
みなこをろこをろに	水はコロロコロと音を立て
こしも あやにかしこし	これはまことに 恐れ多くもオノゴロ島よ
たかひかる 日のみ子	高々と輝く 日の御子さまよ
ことの 語りごとも おこば	お語りいたすは かくのごとくに

◎この歌を奉ると、大君はめでたいことじゃと采女の罪をゆるした。

◎先生解説：酒杯に浮いた槻の葉を、神代の海に浮かぶオノゴロ島に見立てるとはのう。この大君は、すぐに怒るのじゃが、許すのも早いよのう。オレ：野外の宴で、杯に葉っぱが入っていたと言って、杯を持ってきた采女を殺そうとする、愚かな独裁者だと思いがね・・・。

◎次に太后が歌った。

やまとの このたけちに	倭の この高市（たけち）の
こだかる いちのつかさ	小高くなった 市の高みに建てた
にひなへやに おひだてる	新嘗の殿に 茂り立っている
はびろ ゆつまつばき	葉の広い 神のくだる椿の木
そが葉の ひろりいまし	その葉のごと 広々と総（す）べたまい
その花の てりいます	その花のごと 照り輝き座ます
たかひかる 日のみ子に	高々と輝く 日の御子さまよ
とよみき たてまつらせ	さあおいしいこのお酒 どうぞ召しあがり
ことの 語りごとも こをば	語りいたすは かくのごとくに

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎太后が歌った。すぐさま大君も歌を返した。

ももしきの	おほみやひとは	多くの岩や木でできた	この大宮に集う人は
うづらとり	ひれ取りかけて	ウズラにも似て	領巾（ひれ：女性のスカーフ）を肩にかけて
まなばしら	をゆきあへ	マナバシラ（セキレイ）にも似て	すそ触れおうて
にはすずめ	うずすまりいて	庭のスズメか	うずくまり居て
けふもかも	さかみづくらし	今日の良き日よ	酒水浸り
たかひかる	日のみやひと	高々と輝く	日の宮に集う人たちは
ことの	語るごとも	こをば	語りいたすは
			かくのごとくに

◎これら、三つの歌は、天語りの歌（あまがたりのうた）。天語の連らが伝え継いでいる歌。

◎それから、この宴の日には、先の日逃げていた、春日のヲドヒメも招かれてきた。大君は喜んで歌った。

みなそそく	おみのをとめ	水が注ぎ流れる大海の	臣のおとめよ
ほだり取らすも		豊かな垂れモノを手に	なさるよ
ほだり取り	かたく取らせ	大きなあれを手に	今少し強く取れよ
したがたく	やがたく取らせ	しかと固く	いよいよ固くなるまで取れよ
ほだり取らす子		豊かな垂れモノを手に	なさる子よ

◎酒の席で明るく歌う歌なので、いささか卑猥。ホダリとは、チンポコの事なり。

◎先生：拒む女は伝承の様式としてあり、実際に拒み続けるわけではない。いったん拒否したあとに、結ばれるというのは、ヤチホコの求婚を受けたヌナカハヒメも同じ。拒み続けた場合は、相手が天皇の場合には、メドリののように、殺されてしまう。

◎ヲドヒメが歌い返した。

やすみしし	わがおほきみの	八つの隅まで総（す）	べなさる	わが大君が
あさとには	いよりだたし	朝方になると	依りかかり	お立ちになる
ゆふとには	いよりだたす	夕べになると	依りかかり	お立ちになる
わきづきが下の	板にもが	脇息（わきづき：きょうそく：肘当て）	の下の	板になりたい
あせを		わたくしの	愛しい方よ	

◎世の伝えはこれでおしまいじゃ。おなごをめぐる伝えと歌とが多くての、あまりに血なまぐさい伝えばかりでう。血のわき立つ戦語りなどを聞かせたいが、伝えられていない。ワカタケルという名がついているのにねえ。

◎この、オホハツセワカタケルの大君の御年は、百（ももとせ）あまり二十（はたち）あまり四歳（よとせ：124歳）での、己巳（つちのとのみ）の年八月（はつき）九日に亡くなった。御陵は河内の多治比の高鷲（たかわし：はやぶさ）にある。羽曳野市にある、高鷲丸山古墳：円墳。

◎先生：己巳（つちのとのみ）の年：489年 この大君は、5世紀後半に実在した大君であると思われる。

◎羅城門登上層見死人盗人語第十八くらせいものうはこしにのぼりてしにんをみるぬすびとのこと>

◎羅城門：“らしょうもん”と読まれていたが中世から“らしょうもん”と読まれる。羅城とは、都を取り巻く城壁のことで、中国にあったが日本にはない。平城（なら）・平安(京都)の都に在ったのではと言われる。平安京の羅城門は、朱雀大路の南の端に在ったのではとされている。その北4キロに在った朱雀門と共々、相当デカイ建造物の模型が見える。巾35M：7スパン、奥行9M、高さ21M、白壁に木部は朱塗り、床は5段の石の階段。781年桓武時代平安京遷都に伴い、長安の都にならい建てられたが、風で倒れ、再建され、と消滅していったようだ。

◎盗人（ぬすびと）此レヲ見ルニ、心モ不得（え）ネバ、「此レハ若シ鬼ニヤ有ラム」ト思テ、怖ケレドモ、「若シ死人ニテモゾ有ル。恐（おど）シテ試ム」ト思テ、和（やは）ヲ戸ヲ開テ、刀ヲ抜きテ、「己（おのれ）ハ、己（おのれ）ハ」ト云テ走り寄ケレバ、姫手迷（まど）ヒヲシテ、手ヲ摺テ迷（まど）ヘバ、盗人、「此ハ何ゾノ姫ノ此（かく）ハシ居タルゾ」と問ケレバ、姫、

◎今は昔、摂津の国あたりから、盗みを働こうと京に上がってきた男が、まだ日が暮れないので、羅城門の下に立ち隠れていたが、朱雀大路の方はまだ人の行き来がおおい。人通りが静まるまでと思い、門の下に立って、時の過ぎゆくのを待っていると、山城の方から人がたくさんやってくる声でしたので、人に見られまいと門の二階にそっとよじ登ると、見れば、ぼんやり灯りがともっている。

盗人は、おかしなことだと思い、連子窓から覗いてみると、若い女が死んで横たわっている。その枕元に、灯をともし、たいそう年老いた老婆がそこに座って、死人の髪を手荒く抜き取っているのだった。

盗人はその様子を見て、どうにも合点がいかず、もしやこれは鬼ではなかろうかと思い、ぞっとしたが、あるいはすでに死んだ者かもしれぬ。ひとつ脅して試してみようと気を取り直し、そっと戸を開け力を抜いて、「こいつめ こいつめ」と叫んで走りかかると、老婆は慌てふためき、手をすり合わせて狼狽する。そこで盗人が、「ババア お前はいったい何者だ 何をしているのだ」と聞くと、老婆は、「じつは この方は、私の主人でいらっしゃるんですが お亡くなりになって 弔いをしてくれる人もおりませんので、こうしてここに お置きしているのです そのおぐしが 丈にあまるほど長いので それを抜き取り鬘（かつら）にしようと思って 抜いているのです どうぞ お助けください」という。それを聞いて盗人は、死人の着ている着物と、老婆の着衣、それに抜き取ってあった髪の毛まで奪い取って、二階から駆け下り、どことも知れず逃げ去った。

ところで、この二階には死人の骸骨がたくさん転がっていた。葬式などできない死人をこの門の上に棄てて置いたのである。

このことは、その盗人が人に語ったのを聞き継いで、こう語り伝えているということだ。

◎摂津の国：オレが住まいする茨木市あたりから京都まで、能勢方面、兵庫の尼崎あたりまで、と思っていたが、大阪市内のほとんどと、神戸市あたりまでが含まれるようだ。大阪市内や、蘆屋市、神戸市まで含まれていたとは知らなかった。

◎山城の国：オレの感覚では、奈良に近い木津あたりのことと思っていたが、向日、長岡京、山崎、宇治、八幡、それと木津周辺の広い地域が山城の国のようだ。

◎大発見：御所、朱雀大路、羅城門、これらの位置関係がわからない、おかしい、と調べてみての大発見。今の御所は仮の御所、ほんとうの大内裏（だいだいり：平安宮）は今の御所の西1.7キロのところのところに在った。そこからまっすぐ南にのびる道が、朱雀大路。東寺と西寺が左右に並び、その付近に羅城門があった。何だそういうことかと、疑問が解消した。

- ◎今日は阪急芦屋川駅から、阪急宝塚駅まで、コースタイム7時間を歩いてみようという計画。8時ころに芦屋川駅に着き、歩き始めた。1年前にもここから有馬まで歩いたが、「六甲なんて・・・」とぼやきながら歩いたので、「このコースだったか 前と 違うような・・・」と記録もなく、曖昧な記憶のまま歩いております。
- ◎三宅・島上・青西・岡村の4名。予報通りに晴れて青空が出ている。川沿いに、「あれれ あれは ライト・・・」旧山邑家別邸（1924年桜政宗当主：今はヨドコー迎賓館：アメリカ人のフランク・ロイド・ライト設計）
- ◎ロックガーデンこちら、の標識を頼りに歩き、茶店がある場所、ロックガーデンと書かれている。「こんなところを通ったかな」と首を振りつつ滝があり、御堂があり、登り口がある。「おお やはりここだ」
- ◎ロックガーデンとは、岩登りの場所だと思っていたが、この岩だらけの道のことを言うのだと納得。「去年もここは登ったね」えんやころ、コラサ、どっこいしょ、登っていく。眼下に神戸の街並みが見える。歩き始めは皆さんに追い抜かれていたが、ここらあたりに登ってくると、その方々が休んでいる、オジンパワーだ。
- ◎雨ヶ峠で一本取った。六甲は道がたくさんある、どこを登ればいいのかわからないので、パソコンで、芦屋川から宝塚までのボタンを押してみると、ズズとコースが決まった。その図では、雨ヶ峠から左のコースをとっている、前回も左を進んで有馬に抜けた。峠に在る地図では、右に折れ、東おたふく山というコースがある。ベテランそうな爺さんに聞いてみると、「去年通った 道はある 荒れてはいない」ということで、「それじゃ行ってみよう」右のコースをとった。「あれれ ゴルフ場？」なだらかな草原が続く。「ここはいい これはきれい」嬉しい悲鳴を上げながら先を進んだ。ちょうど、山火事訓練だとかで、てっぺんで消防隊員が水を撒いていた。その先を降りて、おりて、長い青いホースが続き、舗装道路に止まった消防車の所まで、そこの川から水を上げていた。20,30人の消防隊員の山火事訓練、ご苦労さんだ、山の焚火はしないように。
- ◎消防自動車が止まっている所に、石宝殿の標識、蛇谷北山コースとなっている。「おお 間違っていない これもいい」「せっかく 上ったのに また下る え まだ下る」ぼやきながら人の少ないコースを登っていく。あと30分ぐらいで、石宝殿に着く、そこで飯にしましょう、えんやころ。
- ◎“石宝殿：六甲山神社（いしのほうでん：むこやま）”12時半着。今日は湯を持ってきて、カップラーメンとコンビニのおにぎり2個。出発時に三宅さんからボタモチとバナナ、途中、手造りサンドイッチをほおばった。
- ◎石宝殿から宝塚までは、六甲縦走路の尾根道だ。コロナの前に、六甲山頂駅の傍に住む福居さんを訪ねるとき、宝塚から歩いた。今日はその反対コースだが、「へええ こんな道だったかな」と記憶に残っていない。900Mの所から少しづつ下っていくとはいえ、登りもあり、急な下りもあり、道はまだまだ遠い。なんだか疲れてきたようで、ペースが落ちてきた。登山道の途中に舗装道路があったり、山の下にトンネルがあるようなところ、スマホの地図を見て、現在地を探り、紙の地図と見比べ、「まだまだ遠いよ 今ここだ」エンヤコラである。
- ◎右下に市街地が広がる。「あれが 阪神競馬場 関学らしい 甲山が低く丸く・・・」霞んでいるが、大阪湾が見える、山々が向こうに在る、淡路島に四国が見えるかな、アメリカも見えるかな・・・あと2時間ぐらいかな。だんだん夕方の気配、花粉症のオレは、鼻ズルズル、ハンカチで拭きながらの山行である。
- ◎オレは、「六甲は嫌だ 嫌いだ 上に道路がある 人が多い」と言っていた。今日しみじみ歩いて、「東おたふく山のあたりはいいねえ」と思ったが、景色がよくない、すばらしいと思える所がない、道路があり車が走る、人が多い、空気も水も汚い、魅力の少ない山だが、家から近いので、また来ようとは思う。
- ◎塩尾寺（えんぺい）にやってきた、ここからはずっと舗装道路、急斜面の住宅地が続く。7時間のコースタイムなので、4時頃には着くかなと計算したが、宝塚に着いたのは5時をまわっていた。オレも皆さんもややばて気味、十三で電車を乗り換えるとき、階段を降りながら太ももが烈断しそうな痛みが走った。
- ◎若い男女のふたり、「終電で 塩屋から・・・」「始発じゃなくて？ 終電・・・」なんと寝ずに塩屋駅から宝塚駅まで六甲縦走コースを歩いて来たようで驚き。夜中の12時出発して夕方5時頃に到着として17時間だ。新田次郎著<孤高の人>の加藤文太郎は、宝塚から造船技師の住まい、和田岬までの100キロを一日で歩いたらしい。この六甲縦走路は56キロ、須磨・宝塚間で、コースタイムは13時間だそうだ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホハツセワカタケルの後を継いだのは、その御子のシラカノオホヤマトネコでの、この大君は、伊波礼（いわれ）の甕栗（みかくり：明日香の近所）の宮に坐して、天の下を治めたもうた。この大君には大后がなく、また御子もないままで、伝えもない。御年も御陵も伝えてはいない。日本書紀によれば、22代清寧天皇：即位後5年で没し河内の御陵があるという。

◎シラカの大君が亡くなると、後を継いで天の下を治める御子が誰もいないということになってしもうた。日を継ぐことのできる方を、皆は考え捜し求めたのじゃ。すると、オホハツセワカタケルの大君に殺されたイチノヘノオシハワケと母を同じうする妹、イヒトヨという方が、葛城の忍海（おしぬみ）の高木の角刺（つのさし）の宮に坐したのじゃった。それで、姫御子ではあるが、男の御子が見つからないということで、次の大君が出でますまでということで、天の下を治めたもうた。

◎先生解説：この何代か前まで、皇子たちは日継ぎの争いを繰り返したために、オホサザキの血統で生き残った男子は逃げて姿を隠したオケ・ヲヨ兄弟以外だれもいないという状況になった。それで担ぎ出されたのがイヒトヨだった。しかしこの女性が女帝として実権を握っていたかどうか疑わしい。

女帝の即位は、33代トヨミケカシキヤヒメ（推古）が初めてで、以後7.8世紀に6人、江戸時代に2人の女帝が即位している。

◎オホハツセは狩り衣の下に鎧をつけ、弓を手に矢筒を腰に下げると、馬に乗って出かけて行ったのじゃ。そして、すぐにオシハの馬に追いついて並んだかと思う・・・オシハを射落とす・・・その体を切り刻んで・・・

◎ここで、イチノヘノオシハの幼い御子、オケとヲヨの二柱の御子たちは、その乱れを聞くとの、すぐさま家を出て逃げたのじゃ。

◎そこでオケとヲヨの二人は、倭から山城の苅羽井（京都府綴喜郡あたりか：猪ではなく豚を飼っていた。9世紀までは食料にしていたのでは）に到り、持って出た糧（かりて）を食べておった時顔に入れ墨をした老夫（おきな）がやってきての、その糧を奪ってしもうた。「そなたは誰だ」「わしは山城の猪飼いじゃ」二人の御子は腹をすかせたまま先を急ぎ、玖須婆（くずば）の河を逃げ渡り、針間の国に到るとの、身の上を隠し、シジムの家に雇われて馬飼い、牛飼いとして使われることになった。

◎時は流れ、針間の国に地方長官が、シジムという豪族の新築の宴に駆けつけた。宴が盛りとなり、次々に立って舞った。火焚きのふたりも指名され、兄が舞い、弟が唱えた。（歌うではなく、朗詠のように唱える）

もののふの わがせこが	武士である わが御子が
とりはける たちのたがみに	腰に取り佩いた 太刀の柄には
にかきつけ	赤い色にて画を描きつけ
そのをは あかはたをのせ	その太刀の紐には 赤い幡をつけ
あかはたたてて みれば	その赤い幡を 立てて見渡せば
いかくる やまのみをの	奥深く籠る 山の尾根に立つ
たけをかきかり	竹を刈り取り
すえおし なびかすなす	その竹の末を押し付け 靡かせるに似て
やつをのこを しらべたるごと	八つの絃（お）を持つ 琴の調べに似て
あめのしたをさめたまひし	平かに天の下を おさめなされた
いざほわけの すめらみことのみこ	イザホワケの 大君の御子
いちのへの おしはのおほきみの	イチノへの オシハの御子の
やつこすえ	われら末にて

- ◎7:30 歩き始めた。昨日急に「比良に行こう」と思い立った。天気予報を見ていると明後日あたりから雨マークが続いている、「今しかない なんて 強迫観念にかられ」とは大袈裟な話だけれど、「それなら弁当を」晩飯が終わってから、「弁当とサンドイッチ 朝飯も車を運転しながらのおにぎりを」と手を動かした。
- ◎1時間で青ガレの下、金糞の滝までやって来てまず是一本、サンドイッチをほおぼった。朝5時半に出発すると湖西のこのあたりまで、1時間半少して来られる。山は朝早く入ると、一日がのんびり長い、昼飯もてっぺんで喰えるということだ。さあ、青ガレを登って、金糞峠まで一本だ。
- ◎金糞の滝で、またまた道を間違えた。1年前も間違えた。道標が付いているのに、アオガレはもっと先だと思っている、二度も間違えるとは、何かの頭の中で信号を送っているのかもしれないね、がはは。
- ◎昔は、電車で湖西線の比良駅まで来て、歩いてイン谷口、それから金糞峠、遠いなと感じていた。10年ぐらい前、車をイン谷口に止めそこから歩くと、「ええ 金糞峠は 意外とすぐだ」と感じていたが、今は金糞峠まで、なかなかエンヤコラだ。二人の方が追い抜いていった。ジジイはゆっくりだがエンジンは止まらない。
- ◎「あ～あ～ えらいめにあつた は～は～ ぜ～ぜ～」である。金糞峠からコヤマノ岳に行く道、何年か前も去年も間違えずに行けたが、今日は川沿いに行ってしまった。この川沿いの道は、武奈ヶ岳からの帰りに何度も通っているので知っているが、今日は真ん中の道を行くつもりだった。「あれれ これじゃ 中峠に行ってる」と気づいたが、右に上がる場所を歩き過ぎてしまった。谷筋は雪がまだ残っている、渡渉が何度もある、早く抜きたい、手がふさがりスマホも地図も見られない。スマホの地図を見ると行き過ぎたことに気付いた、だが、すぐ上に道がある、戻ってばしゃばしゃの渡渉は嫌だ、ここなら登れそうというところを3点確保で登りだした。恐いところの嫌いなオレが小枝を、根っこを、草をつかみ、ドッコイショの30分である。
- ◎11時、コヤマノ岳にやってきた。ここは好きな場所、なだらかな台地の上にブナが群生している。若いブナがよきよき、まだ今は枝ばかりの時、青い空がまる見え、素晴らしい。ところどころに雪が残っている、雪の上を歩かねば行けないところもあるが、想像していたより雪は少なかった。
- ◎1年ちょっと前に、雪の中ここに来ている。その時は身体がだるかった。金糞峠に上るのに、ふ～ふ～言っていた。これはもう体力的に無理かな、衰えが来始めたのか、といささか情けない想いでコヤマノ岳から武奈ヶ岳を登らず、スキー場からカモシカ平をまわって帰った。市の看護師のお姉さん来訪のおかげで、いつもの食べる量を減らしてみた、73キロあった体重が3か月ぐらいでたちまち70キロをきった。それからは体調がいい、もとの元気が戻った、今は67キロぐらいの体重である。
- ◎雪は残っているが、雪を避けて通れるかもというぐらいだが、先ほどの何度かの渡渉でジワリ靴の中が濡れている。雪が残った小石の上、滑るとまずいと水の中をバシャバシャしたのが水漏れの原因だ、冷たいねえ。
- ◎11時半てっぺんにやってきました。コースタイムが3時間半なので、ロスの30分を考えると、4時間ぐらいで登ったのかな。朝、イン谷口で消防車と隊員が数人いた。一週間前の六甲山でも見たので、また山火事消火訓練かと思っていた。3人の若者がいた、「昨日 64歳の男性が 入山して帰ってこないの探してます」なんと消防隊員だった。「カナクソ コヤマノと来たが なにも見ていない」と答えた。
- ◎今回は来た道を引き返すコースにしている。金糞峠と青ガレの間は、まさに谷筋のガレ道、でっかい石、小さい石、ズルズル滑るジャリ、その間をちよろちよろ水が流れる。ガレ道下りは嫌だけれど、今日は、どこをどう間違ってしまったのか、道間違いの検証をしておかなくっちゃ、ちゃんと調べて次回は迷うことの無いようにである。前回は、スキー場を通過して、カモシカ台から帰った。
- ◎帰途、コノヤマ岳付近でオレをじっと見る人がいる、「??」なんと久子さんだった。「久しぶり」ということで下山は同じコースを歩いた。
- ◎間違えたあたり、雪が残っている、「橋を渡って 川沿いに 中峠に向かったのがいけなかった」「橋を渡ってまっすぐ登る道を 探すべきだった」「もう一つ 橋を渡って 左にも行けるのだ」「わかった 次回も間違いなく登ろう」「このコースは 前回もそう思ったが お気に入りのひとつにしよう」

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎前回の歌を聞いての続き：すると、その歌を聞いたヲダテの連は驚いての、床から転げ落ちてきて、その部屋に集うた人どもを外に追い出すと、その二柱の御子を、おのれの、左と右の膝の上に座らせての、喜び泣き悲しんだのじゃった。そしてすぐ、仮の宮を作らせるとの、二柱の御子をそこに住ませおいての、早馬（はゆま）の使いを都に走らせたのじゃ。すると、叔母のイヒトヨはそれを聞いて喜んでの、すぐさま角刺の宮に上りこさせたのじゃった。灰まみれの賤しい童が、まことは大君になられる貴いお方であったというわけよ。

◎先生：二人の御子は火焚きの童だったので、まさに、灰かぶり、シンデレラだ。灰かぶり：シンデレラ<灰 cinderレラ女性：灰かぶり姫>これは知らなかったが、よくよく考えると、「それがどないした」と思ってしまう。

◎その二人の御子が天の下を治めたもうたという、その少し前のこと。大きな力を持っていた平群の臣の祖で、名はシビという男が、歌垣に出かけての、大君になるはずのヲケが娶ろうとしておったおとめに手を出してきたのじゃ。シビの側からすれば、どこの馬の骨ともわからぬやつが、大君の位を与えられるかと気もちだったのかも・・・。おとめは、菟田の首（おびと）の娘で、名はオフヲというた。シビが、ヲケに歌をかけたきた。

おほみやの をとつはたで 大宮の あっちの隅っこ
すみかたぶけり 傾いて倒れそう

◎ヲケが歌い返した。

おほたくみ をちなみこそ 宮作りの大工が 下手くそで
すみかたぶけれ 隅っこが傾いているだけさ

◎シビの臣が歌を掛けてきた。

おほきみの こころをゆらみ 大君の 己が心がゆるゆるで
おみの子の やへのしばかき 臣の子が得ようにも 八重にめぐらす柴の垣
いり立たずあり 超えて入るはむずかしい

◎御子

しほせの なおりを見れば 塩の瀬の 波ぶつかるあたりを見れば
あそび来る しびがはたでに 遊びに来る しび（まぐろ） のそばには
つまたり見ゆ 恐ろしい妻の顔が見えるよ

◎シビの臣は、ますます怒り出して、歌う。

おほきみの み子のしばかき 大君の 御子の邸（やしき）の柴の垣
やふじまり しまりもとはし 八つの節を固く締め しっかり絞めて固めても
切れむしばかき 焼けむしばかき すぐに切れるぞ へぼ柴垣 すぐに切れるぞ 弱柴垣

◎御子

おふをよし しび突くあまよ 大きな魚よ シビ突く海人（あま）よ
しがあれば うらごはしけむ その大魚が逃げたなら さぞ恋しく悲しかろ
しび突くしび まぐろを突いてる シビさんは

◎こうして歌を掛け合って夜を明かし、朝を迎えて帰っていったのじゃ。歌垣で男と男が歌を掛け合うと、ひとりの女をめぐる戦いになることが多い。女が相手だと、男は口説こうとするし、女はいい男を探す。

◎さて、その歌垣が果てた日の朝のことじゃ。オケとヲケのふたりは謀りおうて、「およそ、今の世の中がみだれていて、朝には御門に参りおもむき、昼になるとシビの門に集まっておる。今頃はシビは寝ているだろう。今でなければシビを殺すことはできない」すぐさま戦を興しての、シビの民の家を囲み、たちまちのうちに殺してしまうたのじゃ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎その後のこと、どちらの御子が天の下を治めるか、ということで二柱の御子はまたまた譲り合った。

◎先生解説：譲り合う：針間のシジムの屋敷で、火焚きの童として使われていた二人が、新築祝いの宴の時・・・

◎その時、火焚きの童は、竈のそばに座って火を焚いておった、それでの、その子どもにも誰かが声をかけて舞えというたのじゃ。そうすると、ひとりの童が、「お兄さま まず 舞うてくだされ」というとその兄が、「弟よ そなたがまず先に舞いなされ」というたのじゃ。・・・互譲の精神は、儒教的な徳目として認識されている。高貴なものが備えている徳目であり、火焚きの童がもつべきものではない。客たちはその不釣り合いな譲り合いを見て笑った。

◎兄のオケは、その弟のヲケに位を譲ろうとして、こういった。「針間のシジムの家に住んでいた時 そなたが名を明かさねば 今もって天の下に臨む君はいなかったはず これはまったくそなたの功 われは兄であるけれど 功のあったそなたが 天の下を治めなされ」

◎弟のヲケ：イザホワケの御子：イチノヘノオシハの御子、ヲケノイハスワケは、近飛鳥の宮に坐して、天の下を治めたもうたこと、八歳（やとせ）じゃった。この大君は、イハキのむすめナニハを妻にしたが、子はない。

◎オホハツセは、兄弟を殺し、大君になるためには父の兄弟：イザホワケの子、オシハがいた。狩りが好きな叔父：オシハを近江のカヤノに誘い、オシハを暗殺する目的で、衣の下に鎧をつけ・・・オシハの馬に追いつき・・・オシハを射落とした。その体を切り刻んで、土の中に埋めた。

◎この大君、その父イチノヘノオシハの骨（かばね）を探し求めておったのじゃが、ある時、近江の国に住む賤しい老女（おうな）が参り出て言うた。

「御子の骨を埋めたところを、わたしはよく知っております。また、御子の骨を見分けるには、その歯を見ればわかります」

老女の示したところから、父の骨を見つけ、蚊屋野の東の山に御陵を作った。カラブクロの子らを墓守にした。特徴だった八重歯を河内に持ち帰った。カラブクロは、暗殺のお膳立てをした豪族で、見せしめの墓守なのか。

◎さて、河内の近つ飛鳥の宮に帰り上ると、ヲケの大君は、骨を見知っておった老女（おうな）を呼び出し、オキメの老女という名を賜うた（たもうた）のじゃった。そのまま大殿のうちに召し入れて、厚く広く恵みの品を授け、近くに住ませた。大君は亡き父の話が聞きたくなると、鈴を鳴らして老女を呼んだ。

あさちはら をだにを過ぎて 浅茅原（あさじはら）から 小谷（おだに）を過ぎて

ももづたふ めてゆらくも 遠くに伝わる 鈴の音が響く

おきめくらしも オキメのおうなが来るらしい

◎オキメの老女も、往き来もままならぬ身になり、国元に帰りたいといいはじめ、大君は見送る時に歌った。

おきめもや あふみのおきめ オキメよ 近江のオキメ

あすよりは み山がくりて 明日からは 山の向こうに隠れ行き

見えずかもあらむ 逢うことさえもままならぬ

◎見えないものが見えてしまう、こういう者がまことにおったのじゃ。マヨワも同じだった。オキメ：置目：オキメは、盲目ではなかったのか・・・

◎さて、父イチノヘノオシハが殺されて幼い御子がふたりで倭から逃げ出した時に、その少ない糧を奪い取った山城の猪飼いの老人（おきな）を探させ、都に召し出すとの、その老人を飛鳥河の河原に連れて行って斬り殺し、その山城の猪飼いの族（うから）をことごとく集めての、膝の筋を断ってしもうた。

- ◎またまた武奈ヶ岳、前回、道があやふやだった、ここがおおいに気に入った、今日、明日を逃すとしばらく動けない、なんてなことで行こうと決めた。朝5時起きの予定が、3時ころに目が覚め眠れない。仕方なく3時から起き出し、飯を喰って明るくなるまで雑用をしていた。ということで5時過ぎに出発、6:40イン谷口の駐車場にやってきた。もう4台止まっている、さらに一台が来て、オレより10歳ほど若いおやじ、サッサ着替えてもう歩き出した。小鳥がちゅんちゅん、川の流れがざあざあ、快晴だ。
- ◎7:10歩き出した。エンヤサ・コラサ1時間ぐらいで青ガレの上、いつもの休憩場所で二つ目のおにぎりを喰った。弁当も朝食も昨日の晩に作っていた。今日は早く起きてしまったのでトーストも食べ、車の中でおにぎりも食べた。ここから谷筋のガレバを登って金糞峠まで一本足らずで着くはず。お目当てのブナの森はもっと上だけ、このあたりの自然林もわさわさ、常緑樹が多いのかな、ガレた白っぽい石と緑色である。
- ◎ガレ場の真ん中で立ち止まってきょろきょろ、空はまっさお、琵琶湖がキラキラ、琵琶湖の向こう側の屋根までもがキラリ光ってる。でかい石がゴロゴロ、その隙間に水がチョロチョロ、ちょっと疲れた、一本目をノンストップで歩くとあとがこたえる。ジジイなんだから一本目二本目ぐらいまでは30分ピッチでいかんといかんぞと反省。一本目は一時間以上をノンストップで行ってしまった、意地を出して登ってはいかん。
- ◎金糞峠に登ったら一本取ろうと思っていたが、風が冷たい。先週はまだまだ雪があったが、暖かかったのに比べ、今日は寒い。たった一週間で雪はほとんどなくなっている。そんなわけで、ノンストップで前回迷ったあたりにやってきた。「ええと あれれ これかな なんて また 道が見つからない」かすかな踏み跡と、汚れ切った赤印を発見。一週間前に下りてきたばかりなのに、情けないねえ、と思いつつ、これだこれだと上に進んだ。少し上がるとしっかりした踏み跡がある、肝心の入り口がぼやけているのはいけないねエ。
- ◎杉の大木が多い、自然林の大きな木、とはいえ百年二百年程度で、一千年というようなすごい奴は日本には存在しない。平城時代、平安時代に切り倒され、無くなってしまった。
- ◎前回よじ登って到着したのはこのあたりかなと下を見ると、まだ少し白いものが残っている水の流れは騒がしい。この水量の川沿いを何度も渡渉して歩くのはいやだったね。スマホを出して、「このあたり え 標高が900M代 なんだ もうてっぺんまで たった300Mだぞ」と我がジジイ脚力に感謝、どっこいしょ、登る。
- ◎今日は誰にも会わないねエ、とICレコーダーに話しかけていたら、後ろから元気な人が、こんにちとはと抜かして行った、だんだん樹々の相が変わってきた、ブナが表れだした、ひよろひよろ少年風のブナ郡だ、青年風もいるかな、コヤマノ岳が近づいて来た。何だもうすぐてっぺんだ、だんだん元気が出てきたぞ。
- ◎おっと驚く、「なんだ 大砲か ドスン」と腹に響く音。饗庭の自衛隊演習場の音だそうだ。音だけでは怖くもないが、ほんま物の大砲で、身近に落ちてきたら、右往左往、助けてくれ〜、と走り回らねば。
- ◎10:45てっぺん到着。二人の男がそれぞれ飯を喰っている。今日会う人たちはそれぞれ、男の単独登山者ばかりだ、という珍しい風景。風が冷たいので、少し下の風の当たらない所で弁当を広げた。
- ◎先日、絵描きのみどりさんが亡くなったと聞いた。あれれしまったことをした、というのは、去年神戸での展覧会の案内状をもらっていた。いこう行こうと思っていたが、コロナ禍の真っ最中、今回はパスじゃ、と行かなかった、残念なことをした。オレの絵の数少ない理解者だったと思っている、残念だ。40歳代の頃、ここに連れてきた思い出がある。
- ◎予定通り、スキー場を降り、以前売店のあったところを過ぎて、湿原の木道を通ろうとしたら、木道が半分朽ちている。ありゃりゃ、靴が泥の中、3.4年前には通れたと思ったが・・・、ここはもう通れないね。北比良峠でテントが張る青年がいた。
- ◎ここ、3回ぐらい、チョコレートとひと箱持って登っている、休む度に食べている、うまいねえ。
- ◎北比良からの下り、青ガレほどはガレていないが、急なところ、ゴロゴロ岩のところがある、慎重に下りましょう。カモシカ台で、弁当を喰っている人がいた。「遅い弁当ですね」「地元なもんで 遅い時間に出てきて・・・」大阪から来ているオレにとって、比良はいい山だけれど、地元の人あまり登らないのかな。